

## 第5章

# プーチン時代の口朝関係

A. V. ヴォロンツォーフ

### はじめに

朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）に対するプーチン大統領の政策は、エリツィン前大統領のそれにくらべると、ある意味で対照的だといえる。後者は同国からできるだけ距離をとろうとしていた。それが、1990年代の半ばまでに二国間関係がほぼ完全に凍結された主たる原因であった。そして結局のところ、ロシアの朝鮮半島政策全体が失敗に終わった。ところが、プーチン時代には、最初の2年間のうちに新たな友好協力善隣条約が締結され、首脳会談が3回も行われたのである。それらの会談のなかで、北朝鮮側の表現によれば、「個人的な友情」が両首脳の間にも生まれるにいたった。エリツィン時代には口朝関係に関わる問題は片隅に追いやられていたが、現在では、大統領自身が管轄しているのである。これは1968年の危機（プエブロ号事件）以来のことである。

2000年以降のプーチン時代におけるロシアの対北朝鮮政策の目的は3つに大別されるように思われる。

二国間の協力関係が十分な発展をとげるように保障すること。

朝鮮半島の緊張がエスカレートして軍事衝突にいたるような事態を未然に防止すること。この課題は2002年に米朝間の対立が激化してからとくに現実味を帯びてきた。

北朝鮮にたいする「engagement」（体制を変えずに、国際協力の枠組みと社会・経済改革に引きこむ）政策の実現。この政策のなかには市場化を指向する

改革を促進することも含まれる。

もちろん、これら 3 の課題は互いに緊密に関係しあっている。周知のとおり、ロシアは最初の 2 つの課題で少なからぬ役割を果たし、相当な貢献をしている。

本稿での主たる目的は、ロシアの外交努力の中身を具体的に検討し、また、口朝間の経済協力がいかに北朝鮮の国内改革の起源から成長の過程に影響したかということ考察することにある。この改革は2002年 7 月に公にされ始めた。

これらの点を検討する際に考慮しなければならないのは、ロシアが北朝鮮にとって国際社会への独特な窓口となったということである。それは何よりも、両国首脳間に現在、特別な関係が形成されてきていることに依っている。そのほか、金正日はプリコフスキー極東管区大統領全権代表と月に 1 , 2 回程度定期的に会っているということにもあり、この会談はしばしば長時間におよび、非公式な状況で行われる。さらにまた、金正日とカルロフ駐北朝鮮大使との会談なども開かれていることも影響している。

## 第 1 節 北朝鮮の政策転換

このわずかな期間において口朝関係がどれだけ根本的に変わったか、そして、上記のロシアの政策目的がいかに成功裏に遂行されたか（3 番目の目的をふくめて）ということは、北朝鮮のマスコミ論調を一瞥するだけでもよくわかる。また、同国の指導者がロシアに対して与えてきた評価の変遷にも見てとれよう。

エリツィン時代、北朝鮮のプロパガンダはロシアをもっぱらネガティブに「裏切り者」として描きだしていた。それは、ロシアが北朝鮮のなめている経済上の困難をもたらした張本人の一人であり、また、政治のうえでアメリカに次ぐ外的な脅威でもあるといった具合である。こうした評価は理論的な要請にもとづいて作られたものであるとともに、「偉大な首領」である金日成と金正日の指示によるものでもあった。

たとえば、金日成は1990年代初め、かなりあけすけにこう発言している。

「ソ連と東欧諸国で社会主義が挫折した後、わが国では一連の経済上の問題が生じた。わが国が以前にこれらの国と行っていた貿易はほぼ中断し、また、長期契約も効力を失ってしまった<sup>1</sup>」。

「かつてわが国の貿易において決定的な比重を占めていた社会主義市場が近年、

破綻した。旧ソ連と東欧諸国で資本主義が復活してからは、これらの国は、アメリカの差し金でわが国との貿易をほぼ完全に中断してしまった。それで、われわれは、自国の経済建設に必要な物資をこれらの国から輸入できず、自分たちの製品をこれらの国に売ることもできない。そのため、わが国は経済建設において少なからぬ支障をきたしている。たとえば、かつてわれわれは石油をソ連から輸入していたが、現在ではそれはほとんど止まってしまった。おかげで、勝利化学連合企業所はうまく動かない。また以前、わが国はマグネシアクリンカー（編者注：耐火煉瓦の原料）を大量に輸出して社会主義市場をほぼ独占していたが、いまではその販売ルートも閉ざされてしまった<sup>2</sup>。

北朝鮮指導者の反応は、ロシアの市場改革についても、また、事実上すべての内政・外交についても、同様にはげしく否定的なものだった。

「旧ソ連の人々は…資本主義のもとでかなり苦しみを味わっていた」<sup>3</sup>。

「社会主義が崩壊した国々では、私有化がおこなわれた短期間のうちにもう百万長者が出現した。その一方、大多数の勤労者は、失業と貧困にあえいでいる」<sup>4</sup>。

ところが現在ではまったく正反対の論調に出会う。今では、それらのロシアの問題について、北朝鮮の中央報道機関はこれまでと180度異なる評価と結論を下しているのである。この国の主要な新聞である『労働新聞』は2004年8月に以下のような論説を載せた。これは金正日の訪口3周年にちなんだものである。

「モスクワ宣言後の3年間、朝ロ友好関係は新たな段階に入り、たえず発展している。…こんにち、ロシア国民は、プーチン大統領の指導の下で、社会的安定と国家の団結を達成しつつあり、また、国家の安全保障と利益を守るために大いに努力している。ロシア政府の諸施策と国民の弛まぬ努力のおかげで、社会生活のあらゆる分野において望ましい変化が生まれ、国家の経済力と防衛力が強まっている」<sup>5</sup>。

しかしながら、ロシアからの働きかけが北朝鮮の改革にいかん作用するか、またロシア自身の経験がそれにいかなる影響を与えるか、という問題について論じるためには、ロシアが北朝鮮を国際社会へ引き入れて改革を促すために払っている主観的な努力について検討するだけでは充分ではない。ソ連の崩壊と民主主義ロシアの誕生で北朝鮮がそれまでと根本的に異なる生存条件に置かれるようになったという客観的な結果を見逃してはならないのである。

ソ連とその社会主義システムが崩壊した後、北朝鮮は完全に自分の力だけを頼りにする「自力更生」によって生きのび、行動せざるをえなくなった。以前は「自力更生」は、部分的な、あるいはプロパガンダの上でだけのものではあったが、このス

ローガンは厳しい現実そのものになったわけである。このように状況に強いられて自力のみを頼りとせざるをえなくなった結果、北朝鮮は外国資本との協力に対して前よりも大きな関心を持つようになったのである。

金日成はこう述べている。

「かつて社会主義市場が存在していたときは、われわれは対外貿易において社会主義市場を基本にして、資本主義市場を補助的に利用していた。だが今や社会主義市場はなくなった。あらゆる国が貿易を資本主義的な方法でおこなっている現在、われわれとしても、もう貿易においては社会主義的方法に固執するわけにはいかない。われわれは社会主義市場ではなく、資本主義市場で取引をしなければならず、したがって、それに応じて貿易の形態を変えざるをえない。いまや世界の情勢は一変したのであるから、われわれは資本主義市場に勇を鼓して入って行き、貿易部門での転換を起こさなければならない」。

## 第2節 貿易および経済関係

2002年度の貿易総額は01年の1億1450万ドルに比べて12%増の1億3100万ドルであり、現在もだいたいこの水準である。また、ロシア経済発展貿易省のデータによると、商品の相互供給量もまさに2002年から一貫して増えている。ロシアから北朝鮮への主要な輸出品目は、自動車、プラントとその部品、弾性ゴム、化学肥料、鉄類、石油製品、木材、石炭、魚類などの海産物である。北朝鮮からの品目は、まず「労働力」であり、これが全体の80~90%を占め、続いて日本と中国の製品の再輸出（编者注：中継貿易のこと）繊維製品等である。2002~04年度に、朝鮮人労働者がロシア国内で生産した木材の半製品の生産高は75%増加した。コークス炭とマグネシアクリンカーの相互供給も、ケメロボ州と北朝鮮の金属機械工業省の協力によって再開した<sup>7</sup>。

概して、北朝鮮はロシアの各地域と通商・経済関係を発展させることに大きな関心を示している。専門家の評定では、そこでの最も有望な分野は、林業、石炭産業、農業、漁業である。

実際、ここ数年、ロシアのさまざまな地域と北朝鮮との間で協力事業が一貫して増大してきた。過去3、4年に締結された8つの協定はいずれもうまく機能している。同国と最も活発に協力がなされている地域は、当然のことながら、シベリア

と極東である。

すでに指摘したとおり、ケメロボ州はコークス炭を供給しており、また、北朝鮮の企業はサハ・ヤクート自治共和国で石炭埋蔵地を共同開発している。ハバロフスク地方とアムール州は木材の半加工で、沿海地方は木材加工と海面栽培で、協力している。さらに近年では両国の各種組織が野菜栽培で協力するようになっており、その地域は、極東では沿海地方とアムール州、中部ロシアではモスクワ州とカルーガ州である。漁業と魚加工での協力は沿海地方、マガダン、カムチャッカ、サハリンの各州で、住宅建設での協力はサハリン、チュメニ、ノボシビルスク、ケメロボ、ボロネジの各州、アディゲ自治州、沿海地方、クラスノヤルスク地方で行われている。また、工場建設の協力は、ブリヤート自治共和国、チェリャビンスク州、ハバロフスク地方、沿海地方という具合である。

ソ連時代につくられた合併企業、たとえば工作機械製造工場「熙川・ゴーリキー合営会社」( 编者注：北朝鮮の熙川工作機械総合工場とソ連のゴーリキー工作機械生産連合体とによる1989年に操業した合併会社 ) といったものもいくつか機能しつつづけている。その他、こうした企業としては経済特区である羅先市の海産物加工工場もある。

2002年には契約が増えて法的基盤が拡充されたことにより経済協力がさらに進展することになった。例としては、2月11日にロシアの株式会社「極東投資会社」と北朝鮮の対外経済協力推進委員会との間で覚え書きが調印された。この覚え書きでは燃料・エネルギー・原料、林業、建設、交通の各分野での協力が見込まれている。また、いくつも契約がむすばれたことで、協力関係はいよいよ充実したものになった。とくに以下の契約は効果的だった。ロシアの「極東産業商業会社」と北朝鮮の「綾羅島会社」との契約では原油200万トンが勝利化学連合企業所に供給されることになった。また、ロシアの「ヴォストクチェルメト」社と北朝鮮の「船舶」社との契約では、老朽化したロシア船舶が、年間1万トン以下、解体のために納入されることになった。

もちろん、両国の経済協力には少なからぬ問題と障害が残っている。とくに専門家が指摘するのは北朝鮮の外貨の不足や対口債務問題の未解決であり、さらに、北朝鮮側の惰性と心理的なステレオタイプがある。これは、どうしてもソ連時代の協力形態に戻りたがったり、無期限の借款を欲しがったりするなどといったものであり、彼らはここからなかなか抜け出せないのである。

しかしながら、以下のことは指摘しておかねばならない。専門家のなかには、経

済協力といってもその物理的な規模は微々たるものだ」と強調したがる人々がいる。実際、現在の規模はソ連時代のそれとは比較にならない。1980年代末の貿易総額は10億ドルを超えていたが、現在、北朝鮮の貿易総額にロシアがしめる割合は5～6%に過ぎないという。また、金額が伸びているというが、南北間のそれとは段違いであって、南北の2002年の貿易総額は6億4170万ドル、前年比59.3%増にも上るということである<sup>8</sup>。こうしたことがらにもとづいて、彼らが導く結論は、両国関係における経済的ファクターはとるに足らず、したがって、ロシアが何らかの影響を北朝鮮に与える可能性はごくわずかしかなければならないというものである。

なるほど、これは全体としては客観的な判断ではあるが、抜け落ちている点が見られる。経済協力というのは多面的なプロセスなのに、彼らの見解では物理的な規模しか考慮されておらず、他のきわめて重要なファクターが考えられていない。

そうしたファクターとしては、第一に、口朝経済協力のレベルを計るために何と比較するか、ということが挙げられる。中国、日本、韓国のような上位国とくらべるのも大事だろうが、ロシア自身のかつての水準と比較するのも重要であろう。たかだか4、5年前には、口朝貿易総額は7、8千万ドルに過ぎなかったのである。経済難、外貨不足、投資できる資金の不足といった問題は北朝鮮だけでなく、ロシアのほうにもある。こうした状況を勘案すると、これだけ短期間で貿易が倍増したことはやはり「プーチン外交」の目に見える成果であろう。

第二に、周知のように、両国協力の中心課題のひとつは一連の工業施設の再建である。それらは、かつてソ連の技術協力によって建設されたもので、北朝鮮経済にとって枢要な意味をもつ。北朝鮮側が作成した「最大綱領」には、そうした施設のリストがふくまれているが、それはかなりの規模にのぼり、再建費用の総額は10億ドルを上回る。一方、北朝鮮は「最小綱領」も作成しており、同国の公式な提案はこれをベースにしたものである。この内容は、ロシアに経済援助を要請し、4つの火力発電所、金策製鉄連合企業所、勝利化学連合企業所の修復と拡張を行うというものであるが、実現に要する費用総額は専門家の試算で6億ドルである。

もちろん、こうした提案は、その投資額にしても、「昔ながらの」特別扱いの借款という条件にしても、ロシアに受け入れられるものではない。だが、ロシアはこれを頭からしりぞけることはせず、その実現可能な形態をもとめて北朝鮮側と精力的に協議している。たとえば、上記の施設の一つである東平壤火力発電所について、ロシア側はその近代化のために5千万ドル以下の借款の供与を検討できるが、ただし、もちろん、債務問題が決着したあとのことであるという結論に達してい

る。このプランは、現在、関係省庁の間で実際に討議、調整されている。

「最大綱領」のほうに関しては、ロシアは積極的に3カ国協力の図式を提案したが、それはある程度順調にしているといえる。これは、ロシアの対韓国債務を整理してもらい、その分をロシアは北朝鮮に技術援助を供与するというものである。この計画がうまくいき、ロシアの援助のもとで北朝鮮工業の「旗艦」が稼働するでしょう。そうなれば、当然、単に同国経済の正常化の上で大きな効果が上がるということで重要な意味を持つだけでなく、口朝経済協力の性格と意義が一変することになる。

それから、南北の鉄道とシベリア鉄道の連結、ロシアから北朝鮮を経由して韓国にいたるガス、石油のパイプライン敷設などの有望な大プロジェクトについても述べておかなければならない。ロシアはこれらのプロジェクトを実現するため率先して活動してきており、それらが実現すればロシアは一躍、南北の二つの国にとって主要な経済上のパートナーになることになる。鉄道プロジェクトがどれだけ進んでいるかは次の事実をみればわかる。まず、朝鮮半島縦断鉄道の東部区域の修復・近代化について話し合う口朝合同委員会が設置され、これは順調に活動している。また、2002年11月、ファジェーエフ鉄道相が平壤を訪問した際に両国の鉄道省間の協力に関する覚え書きが調印された<sup>9</sup>。

この調印の前後に、ロシア鉄道省は以下のような膨大な作業をしている。第一に、北朝鮮領内の日本海岸沿いの鉄道区間（約800<sup>km</sup>）を徹底的に調査した。第二に、技術・経済上の見積もりを行った。これは韓国から北朝鮮、ロシアを通してヨーロッパにいたる将来の大鉄道の東側部分についてのものである。ロシア鉄道省は、その建設が技術的に可能であり、経済的にペイすることを裏づけたのである。

また、ロシアは北朝鮮との「特別な」関係を利用して、北朝鮮に対して鉄道プロジェクト実現のためには3カ国の協力が不可欠であることを納得させた。それまで北朝鮮は、概して、3カ国以上にわたるプロジェクトに参加することを避けてきた。2004年4月、モスクワで初の3カ国協議が開かれ、この問題について討議した。この会議は、北朝鮮が初めて3カ国以上のフォーラムに参加した点でも画期的なものになったのである。

それから、近年ふたたび、ロシア—北朝鮮—韓国のルートのガス・パイプライン敷設というアイデアが活発に論議されるようになった。そこでは二通りのルートが検討されている。イルクーツク州コヴィクタ・ガス田からのそれと、サハリン州からのものである。

以上のべてきたように、口朝の経済協力には諸々のファクターが働いている。ロシアの粘り強く長期的な努力はそのなかでも無視できないものである。こうしたファクターが重なった結果、現在では単に量的な発展だけでなく、質的な変化が生じているのである。それには疑問の余地がない。

そうした質的变化の例として、北朝鮮がロシア側の主張と論拠に耳をかたむけ、ソ連時代とは異なる協力形態に移りつつあることが挙げられる。すなわち、プラグマチズムと利益の平等という原則にもとづき、新たな条件で協力するという、苦しい見直しのプロセスを通過しているのである。

これはとりわけ、対口債務問題（ソ連時代の債務）についてのアプローチが本質的に変化したことに現れた。依然として両国は最終決着にいたっていないとはいえ、何回かのむずかしい交渉のなかで（交渉の対象は、根本的なことからであり、協力の今後の発展を抑制している）北朝鮮側は、彼らの表現によれば「前例のない」譲歩に踏みきった。それは債務額、為替レート、返済条件に関するものだった。その結果、彼らは全体として、ロシア側の提案どおり金融システムの一般的な「市場」の原則をほぼ受け入れるにいたった。そして、これは債務問題の解決に向けた道を開くことになった。おそらく、彼らはそのために意識とアプローチを変えねばならなかったろう。

ロシアの外交当局はいくつかの経済関係省庁とともに、ロシア、北朝鮮、韓国の3者という枠内で積極的に様々な提案をしてきたのであるが、初めはソウルでも平壤でもあからさまに懐疑的にみられた。しかし、いまや、2、3年前には考えられなかったような目にみえる成果をもたらしはじめた。その裏づけとして以下の例を挙げることができる。

ロシア—北朝鮮—韓国のルートのガス・パイプライン敷設に関して、最近まで韓国ではその意義についてきわめて懐疑的だった。ところが今では状況が一変した。それは、近い将来に「京都議定書」が発効するであろうという見通しと絡んでいる。同議定書はすべての加盟国に、とくに、大気中への有害物質排出に関して厳しい制限を義務づける。そのおかげで、韓国政財界にとって、ロシア天然ガスの価値は、北朝鮮内を通るという輸送路の価値を含めて、跳ね上がったのである<sup>10</sup>。

鉄道プロジェクトで3カ国が協力するというアイデアについて、北朝鮮は当初、断固反対しており、概していかなる形でも多国間にわたるプロジェクトへの参加は受け入れられない、としてきた。ところが、すでに述べたように、口

シア側の努力が実って初の3カ国協議が2004年4月に開かれ、そこには、鉄道関係者だけでなく、関係省庁、外務省も参加したのである。

北朝鮮にロシアの援助で原子力発電所を建設するというアイデアについて、韓国はソ連時代以来一貫して警戒して関わらないようしていた。そのことを裏づけるのは、ロシアが北朝鮮に軽水炉2基を国際コンソーシアムである朝鮮半島エネルギー開発機構(KEDO)を通じて建設するプロジェクトに参加できなかったということである。だが、韓国は今では、北朝鮮が労働力を提供し、ロシアが技術を提供し、韓国が資金を提供して北朝鮮に施設を造るという、ロシアが提案する方式のプロジェクトでさえ、自分の利益になると考えている。北朝鮮の崔泰福最高人民会議議長もまた、モスクワ訪問時に似たような方式のプロジェクトをロシア側に提案してその実現を要請している。韓国はアプローチを変えた動機のひとつは、このプロジェクトが実現すれば、北朝鮮が核不拡散体制にもどり、KEDOの枠組みにも復帰する可能性があると考えたことである<sup>11</sup>。

韓国の事業家たちは韓国—北朝鮮—ロシア—ヨーロッパ大鉄道建設についての経済的合理性に疑問をいただいていたのであるが、北海道、サハリン、ロシアの大陸部分を海底トンネルでつなぐという口日プロジェクトの有望さがこの疑念を吹きはらうことになった。それどころか打って変わって、韓国が、北東アジア輸送路の一大センターになると見こんで「乗り遅れまい」とこれに積極的に参加するようになったのである<sup>12</sup>。

ロシアの技術で北朝鮮の企業を復興させるために韓国が資金を提供するというアイデアは、韓国でつい最近までしばしば、「それはみんなにとって得になる—ただし、われわれを除いてだ」といった露骨な疑惑を呼び起こしてきた。しかし今ではかなり雰囲気が変わった。それは、2002年後半から2003年初めにかけて南北経済協力が著しく活発になり、また、南北双方が新たな朝鮮戦争勃発の危機をはらむアメリカの対北朝鮮軍事行動を抑えようとしたためである。こうした状況にあって、韓国では、北朝鮮の企業が正常に機能するようになればそれは自分たちの直接的な経済的利益にもなると見るようになったのである<sup>13</sup>。

### 第3節 文化交流

この時期、ロシアと北朝鮮の間で政治的関係と文化交流も、経済関係におとらず順調に進展した。

周知のとおり文化交流は社会のメンタリティーを徐々に変える重要なチャンネルである。北朝鮮と今や市場経済化して民主国家となったロシアとの文化交流はもっぱら急速なテンポで発展している。大統領専属オーケストラ、合唱団「モスクワのクレムリン」、モイセーエフ国立民族舞踊団、エリセーエフ指揮する内務省歌謡舞踏団といったロシアのトップクラスの芸術家や団体が恒常的に北朝鮮に招かれて公演している。金正日は必ずそれらの公演をおとずれるばかりか、彼らを招いて歓談する慣わしである。また、平壤での9月の祝典にロシアの映画が出品するのも慣行になった。

教育の分野での協力もたえず活発になっている。留学生の交換も再開した。2000～2001年度にロシアに来る北朝鮮からの国費留学生は10名にすぎなかったが、2001～2002年度には30～35名に増えている。ヨーロッパ・ロシアへの留学は足代が高くつくということを考慮して、両国は大学留学生のほとんどをシベリアと極東に送るという協定を結んでいる。だが今では芸術分野の学生はモスクワ音楽院（指揮科）やサンクトペテルブルクにある国立ワガノワ・バレエ学校などといった最高の名門大学にも留学している。

また、かなりの数の私費留学生が来るようになったが、これもひとつの現象といえよう。というのは、北朝鮮が若者を、いまや「資本主義国」になったロシアへ送りだすのがどれだけむずかしい決断か、筆者にはよくわかるからである。筆者はかつて、駐北朝鮮大使館員として文化協力を担当しており、そのことを目の当たりにしていたのである。しかし、現在はそうした心理的障壁が克服されるにいたった。それはなんといっても、ロシアに負うところが圧倒的に大きい。北朝鮮は今やロシアに対して特別に友好的な関係を持つにいたっているからである。

一方、ロシアの学生は現在、平壤音楽舞踊大学と平壤教員大学で学んでいる。また、2001年にロシア科学アカデミーと朝鮮科学院との学術協力協定、プーシキン国立ロシア語大学と平壤外国語大学との協力協定、国立極東技術大学と平壤の金策工業総合大学との科学・技術・教育協力協定などが調印されているが、いずれも活発に機能している。

モスクワ国立大学と金日成総合大学の間でも協力に関する協定調印の準備がすすんでいる。2004年8月、平壤で金日成総合大学総長は筆者に対して、2005年のモスクワ国立大学創立250周年に際して自分がモスクワを訪れて同協定に調印することですでに合意していると語った。また、学位についての協定案も専門家レベルで検討されている。これは両国双方の各種学位を認め合おうというものである。さらに2002年にはロシア国立歴史博物館と朝鮮革命博物館が協力を再開した。両国の古文書館、科学アカデミー・シベリア支部と朝鮮科学院も協力協定を結んだ。オムスク州プーシキン図書館は平壤での展示会に参加した。また、2000～2001年の2年間だけでもロシア国立図書館（旧レーニン図書館）等のロシアの図書館は約1000部の図書を北朝鮮に贈っている。

#### 第4節 政治的関係

ロシアと北朝鮮の間での政治対話は首脳間をはじめ高いレベルで不断におこなわれている。しかも、その密度はあいかわらずきわめて濃い。

2002年のできごとをふり返ってみよう。まず、ロシア側からの北朝鮮訪問は、プリコフスキー極東管区大統領全権代表（2月と4月）、イワノフ外相（7月）、ヤコブレフ・サンクトペテルブルク知事（4月）、ルシコフ・モスクワ市長（12月）、ファジェーエフ鉄道相（10～11月）であった。そして北朝鮮側からのロシア訪問は、崔泰福最高人民会議議長（3月、モスクワ）、趙昌徳副総理（4月極東）、白南淳外相（5月、モスクワ、極東、15年ぶり）、梁万吉平壤市人民委員会委員長（1月、そして2003年2月にモスクワ）である。

また、同2002年には両国のさまざまな省庁や団体間の協力関係が復活して発展した。そのなかには軍事面での協力も含まれる。10月には李明洙副総参謀長を団長とする朝鮮人民軍代表団が訪れた。10月末から11月初めにかけては呉琴鉄空軍司令官を団長とする北朝鮮の空軍代表団が訪れたが、これに先だってヤクボフ・ロシア極東軍管区司令官が平壤を訪問している。4月には北朝鮮の李済善総局長を団長とする原子力総局代表団がモスクワを訪問した。同月、姜東根副院長を団長とする朝鮮科学院代表団がモスクワとノボシビルスクを訪問した。

しかしなんといっても、両国間における2002年のハイライトは金正日国防委員会委員長が8月に極東を訪問したことである。金正日とプーチンの首脳会談は過

去 2 年間で 3 回目という前代未聞のことである。

この訪問は、前回のそれと同じく鉄道による長期にわたるものであり、二国間関係だけでなく、北朝鮮内部の変革にも相当な影響をおよぼしたといえる。というのは、金正日の主たる目的の一つはロシアの改革の否定的な側面と肯定的な側面の双方を注意深く観察することにあつたからである。そして、後の金正日の見解では肯定的な点は少なからぬものであつた。よく知られたことだが、最初の訪口の後で金正日がプーチンに頼んだことは、次の訪問では公式行事の数を減らしてくれ、というのであつた。それは「新たな所有形態」の企業視察を含めてロシア経済の現状視察にもっと時間を割くためだということであつた。すでに述べたとおり、北朝鮮では 2002 年 7 月に社会経済的な改革が始まったのであるが、専門家たちは、最初の訪口で受けた印象がある程度それを刺激したと考えている。そして 2 度目の旅行もやはり「社会・経済的メカニズムの改善」のその後の歩みに影響したようである。

翌 2003 年も同様の密度の濃い政治対話が續いた。プリコフスキー極東管区大統領全権代表や、ダリキン沿海地方知事などの何人かのロシア政府高官が北朝鮮を公式訪問している。同様に北朝鮮からも金属機械工業相、軽工業相、対外文化連絡委員長代理など、多くの高官が訪れた。

今年 2004 年もハイテンポで交流がおこなわれている。4 月にはロシア外務省第 1 局のアファナーシェフ局長が平壤を訪問した。これが、5 月に北京で行われた 6 カ国協議第 1 回作業部会に影響を与えたことは間違いなく、北朝鮮の立場がより調整され柔軟なものになった。同 4 月、全明国林業省次官の率いる代表団がロシアを訪れ、林業協力に関する日朝政府間委員会第 6 回分科会に参加した。

同 2004 年 4 月には、もう一つ、重要かつきわめて象徴的なできごとがあつた。ゴンチャロフ副委員長を団長とするロシアの自由労組連合の代表団が北朝鮮に入つたのである。この訪問はまさに北朝鮮の学生、大学院生のロシア留学と似たような意義を持っている。すなわち北朝鮮が心理的に難しい決断をして新生ロシアという思想的に相容れない「ブルジョア」的環境へ学生を送りこんだことと同じく、ロシア側のエリートの考え方も思想上の対立者とすすんで交流しようという方向に変わりつつあることを証しているのである。これも 2 , 3 年前には予想できなかったことである。

第 22 回平壤友好芸術祭「四月の春」では、モスクワ国立劇場「ロシア・バレエ」がグランプリをとった。6 月には朝鮮科学院院長がモスクワを訪問してロシア科

学アカデミーと新たな協力協定に調印した。また、今年2004年上半期だけで、モイセーエフ国立民族舞踊団と内務省歌謡舞踏団が2度ずつ北朝鮮公演をしている。恒例どおり金正日が公演を訪れた。それから、6月、プーシキン国立ロシア語大学でロシア語国際弁論大会が開かれたが、優勝したのはほかならぬ北朝鮮チームだった。これは、同国では相変わらずロシア語にいちばん力が入れているということを物語っている。

8月、ロシア最高裁判所長が訪朝し、9月には序列第3位のミローノフ上院議長が訪朝が予定されている。軍関係省庁、諜報機関の交流もつづいている。

2004年のハイライトのひとつは7月にロシアの外相が南北双方を続けて訪問していることである。儀礼の面からするとこれは公式訪問だったので、5月の韓国外交通商部長官の訪問に対する答礼ではなく、それ以前の公式訪問、すなわち2002年5月に北朝鮮の外相が、2003年10月に韓国外交通商部長官がそれぞれモスクワを公式訪問したことに対する答礼である。しかしそれより大事なのは、ロシアの外交が南北をペアで訪問するという新しい慣行を作ろうとしているように見えることである。専門家たちは、ちょうど2年前にイワノフ外相が似たようなかたちで「二連発」の訪問をし、この半島に、文字どおり、平和のオリーブの枝をもたらしたことを連想している。そのとき、外相は金大中韓国大統領の親書を金正日に手渡すことができたばかりではない。その直前に南北の艦艇が交戦したことによって関係が緊張していたのであるが、外相は南北間の緊張を緩和するのに一役買ったのである。今回、ラブロフ外相も同様に仲介者としての役割を果たしたのである。

ラブロフ外相がソウルと平壤を「二連発訪問」したことによってロシアの意欲がまたもはっきりと裏づけられることになった。それは、朝鮮半島という「狭間」の地域で仲介を含む積極的な役割を果たすという意志である。ロシアが南北の接近を一貫して支持しておりそれを促進しようとしているという事実は、南北のいずれでも、しかるべき評価を受けたのである。

さらに、今回の訪問は以下のような好ましい背景で行われたことということがその特徴の一つだといえる。それは、ロシアと北朝鮮、韓国との関係がダイナミックに発展していること、そして、それが最近また新たな力を得たこと、それから、北朝鮮の核開発問題をめぐって一定の前進がみられたことである。周知のとおり、北京でつい先ごろ終わった第3回6カ国協議でこの問題はやっとある程度前進を見せることになったが、ここでのロシアの貢献はけっして小さくなかった。それは、今回の会談における成果はアメリカを含む6カ国すべてが「パッケージ」方

式に同意したことにあるが、この構想はそもそもロシアが提案したものだったということで、十分明らかである。

ラブロフの平壤での会談はきわめて密度の濃いものであった。注目されるのは両国外務省の交流に関して新しい議定書が調印されたことである。なにしろ、近年口朝関係は、とりわけ政治的な面でかつてない水準にあるため、たえず「時計を合わせる」ことが必要となり、それが今回行われたわけである。会談で焦点になったのは北京での6カ国協議での成果と今後の戦術の調整である。6カ国協議の成功は口朝指導部の協力に負うところが大きい、ということは平壤、ソウルのいずれもが理解していた。平壤では、とにかく自分たちの立場をよくロシアに聞いてもらい、理解されることが重要だとわかっている。それは、ロシアが、金正日が最近訪問した中国とともに、自分たちに敵対的でなく、圧力を行使しない数少ない国の一つだからである。対決姿勢に凝り固まったアメリカをロシアが少しでも動かしてくれるだろう、という計算がある程度正しかったことが明らかになりはじめたのである。

「二連発訪問」のメイン・イベントは1時間半におよぶ金正日との会談であり、その席上でラブロフはプーチンの親書を手渡した。外相は、なぜロシアが最近アメリカの大量破壊兵器拡散防止構想（PSI）に参加したのか説明したのだが、北朝鮮ではこのプロジェクトが自分たちを狙い撃ちにしたものだと思われていたものであった。ところが、大方の専門家の予想に反して、平壤はこれに理解を示し、平静に受けとめた。このことは口朝の特別な関係が続いていることを物語っている。さらに、会談後の記者会見で外相が語ったところによると、金正日は、親書の内容について感謝の意を表したという。プーチンは親書のなかで、4年前に締結された友好善隣協力条約にもとづいて両国関係を発展させていく用意と決意があると確認していたのである。その条約では両国が「相手国の主権、独立、領土保全に反するいかなる行動、施策にも、加わってはならない」という義務を負うことになっていることを思い出してもらいたい。それから、ロシアの外相は記者会見で、「北朝鮮指導者は、ロシアがつねに実のある援助を与えていることに対して感謝の意を表明した」と述べた<sup>14</sup>。外相によると、金正日が挙げたのは、最近の鉄道での大惨事に際してのロシアの支援活動、また、ロシアによる穀物3万5千トンの供与である。さらに会談では経済協力に関する問題、とくに北朝鮮の労働力の「合理的利用」についても検討された。

ラブロフ外相の朝鮮半島訪問は、口朝関係の今後の発展に寄与したし、朝鮮半島

問題でロシアがイニシアチブを発揮して問題解決の過程で重要な役割を演ずるとい  
う役割をいっそう揺るぎないものにしたり、また、市場経済という新たな条件下で  
経済協力を進めていくうえでも有益であったと、以上のことから考えられる。

ロシアは北朝鮮核開発問題の平和解決をもとめて北朝鮮に対する引き込み政策  
(engagement)を展開している。引き込み政策は2000年7月のセンセーショナ  
ルなプーチン訪朝をもって始まった。ロシアの路線は具体的な成果をもたらしたと  
いうのである。2002年に開始された北朝鮮の経済改革は、困難な対外的状況にも  
かかわらず、継続している。筆者は同国を毎年訪れており(ときには、年に数回)、  
新しい「市場」的な要素がますます増えていくさまを目の当たりにしている。ま  
た、韓国外交通商部のシンクタンクである外交安保研究院の専門家たちが2004年  
6月に開かれたロシア・朝鮮セミナーで主張したのは、彼らの試算で北朝鮮にお  
ける改革の初期段階は中国のそれをも上回るペースで進行しているということであ  
った。

意外に思われるかもしれないが、2004年4月の龍川駅での大惨事は改革の進捗  
度をしめす指標になった。この北朝鮮史上最大の鉄道事故は現在のこの国特有の問  
題をいくつか照らしたしたのである。

第1に、この惨事は、鉄道をふくむ交通インフラのはかばかしからぬ現状を露  
呈した。鉄道はただちに全面的近代化を必要とする状態である。しかし、北朝鮮  
指導部は問題の深刻さを十分自覚しているようである。現在、ロシアの高等教育機  
関にいる北朝鮮人留学生の数は100人を超えているが、その半数以上がおもにシベ  
リア、極東でほかならぬ鉄道大学で学んでいるということはそれを示唆している。  
平壤が鉄道の近代化を焦眉の課題と位置づけていることは疑う余地がない。また、  
こうした危機感は、同国が韓国—北朝鮮—ロシア—ヨーロッパ大鉄道建設に積極的  
なことにも反映している。

第2に、鉄道惨事に際して北朝鮮は国際機関に支援をもとめ、実際に国際機関  
と政治的、技術的問題の調整に入ったのであるが、その速さは同国では異例のこと  
であり、多くの専門家を驚かせた。こうした現象は、平壤で南北首脳会談と口朝首  
脳会談が行われた2000年という分水嶺から歳月が無駄に過ぎてきたわけではな  
いことを裏づけているようである。この事実は北朝鮮が徐々に国際協力と社会・経  
済改革に「引きこまれつつある」ことを示している。すなわち、ゆっくりではある  
が確実に「engagement」政策に沿って進んでいる、ということである。

まさにこのプロセスにおいて、ロシアの対朝鮮半島政策は、重要な役割を演じて

きたといえる。ロシアは、首脳間の「個人的関係」などの政治面での「特別な」関係を駆使して間接的に北朝鮮での改革開始を促し、そして、北東アジア地域での国際協力の枠組みにこの国を次第に引きこんだ。ここでまた思い出してもらいたいのは、金正日が2回の訪口をほかならぬ鉄道を使って行い、自分の目でロシアの市場改革の結果を見たことである。金正日は2001年8月、モスクワに着くとプーチンに語った。

「わたしは、うちの部下たちがわたしに情報を必ずしも正確に伝えてこなかったと確信しました。彼らの報告は、ロシアでは計画経済から市場経済への移行によって否定的な結果ばかりが生じ、工業生産力が激減し、大多数の国民の生活水準は急激に低下し、失業者は増大した、云々といったものでした。しかし、わたしの見るところでは、ロシアの経済改革は明らかによい結果ももたらしてきています」。

口朝関係は新たな段階に入り、かつてのソ連時代にあったような蜜月期にも考えられなかった性格を帯びつつある。これを象徴するのは北朝鮮で初めてロシア正教寺院が建立されていることである。この寺院は500人を収容する聖三位一体聖堂である。2003年6月に始まった建設は急ピッチで進められており、2005年に竣工が予定されている。工事は北朝鮮側の資金でまかなわれており、ロシア側は鐘を提供するのみである。筆者は2003年7月と11月、2004年8月に現場を訪れる機会があった。現在、建物は、丸屋根の下の部分まで積み上げられている。

## 結びにかえて

参考までに、筆者が2002～2004年に北朝鮮を訪問した際につけたメモから何カ所か抜粋して、以下に挙げよう。それらは北朝鮮経済改革の傾向とそこでロシアが果たしている役割を理解してもらうための一助になるだろう。

2003年7月、平壤東部にある「モランボン」の縫製工場を訪問した。これは北朝鮮経済でポジティブな変化が起きていることを示す目的で設立されたモデル企業だとの印象を受けた。ところが、工場長のチャン・ギムソク女史は外国人訪問者が多いことを隠さなかった。そして、この工場のほかにもっと大規模なものもあるといった。この7階建ての建物は清潔で1100人が働いている。もちろん、ほとんど女性である。縫工たちはわれわれの目の前で輸入物の生地を使い、日本製のブランドで美しい現代的な衣服（紳士用、婦人用、子供用）を縫っていた。製品の

20%だけが国内向けで、残り80%が輸出用である。輸出先は、日本、米国、香港などであるが、最大のパートナーは韓国企業であり、ここは製品の30%を受けとる。そのとき、縫工たちはちょうど大阪向けの品を梱包しているところだった。北朝鮮には顧客の材料で製品をつくる企業がいくつかあるが、これは、そのなかでも典型的な成功企業である。収益は年間150万ユーロになる。賃金はきわめて高く、3000~10000<sup>ウォン</sup>であり、平均すれば5000<sup>ウォン</sup>である。7月改革以前は150~200<sup>ウォン</sup>であった。ここの給料は中堅クラスの政府職員のそれを上回っている。

2003年11月に北朝鮮を訪問した。ぜひ指摘しておきたいことであるが、エネルギー供給状況は次第に改善されてきている。今では平壤市内のすべての家屋で明るく灯がともっているだけでなく、市中心部の街灯も点灯されはじめた。だが、いちばん強い印象を受けたのは、夜遅く元山から平壤まで車で戻ったときのことであるが、沿道200<sup>キロ</sup>にわたってすべての村落で灯りが入っていたことである。このことだけでなく、この国の様々な地域で受けた印象は、商品・貨幣関係や商業に関する2002年の「7月措置」で始まったプロセスは今も続いているということである。われわれは、それを示す多くのかつてない目にみえる現象に遭遇したのである。

わたしは4ヶ月ぶりに平壤を訪れたが、その間に大通りのひとつ「統一通り」に大きな食料・雑貨市場がオープンした。おもな特色としては3棟の建物すべてが屋根で完全に覆われていることで、これは初めてのことである。しかし、いちばんの、まさに「革命的な」新しさは外国人もここで買えるということである。外国人の購買が初めてこの市場において許可されたのである。外国人のほうもその新たな可能性を喜んで大いに利用している。こうした許可が出た理由はこの市場の快適さと衛生のレベルのようであり、地元の当局はそれが現代的水準をクリアしていると思ったのであろう。

首都のキオスクの品揃えも、移動可能な形態のキオスクのそれも含めて、格段に豊富になった。また、加工度の高い食品も増えた。たとえば、ペリメニ（訳注：水餃子に似たロシア料理。煮れば食べられる状態で売っている）などの肉の半加工品である。もう一つこの方面で目につくのは、道路沿いで商売できるようにインフラが整備されたことである。首都からかなり遠い地域でも、都市・村落間の沿道に売店がでているのを見た。商品はまだ素朴なもので、果物、野菜、飲み物、ビスケット、タバコ等だった。

「7月措置」はいたるところで実施されていた。刺繍研究所では、「モランボン」と同じく、給料にいくつかの段階が設けられており、熟練度、仕事の種類と量など

に応じて賃金が違ってくる。具体的には2000<sup>ウォン</sup>から6000<sup>ウォン</sup>までである。興味深いことに、熟練工の場合、刺繍の絵柄にも新味が出てきていることである。つまり、朝鮮の風景など伝統的なものだけではなくなってきた。なぜか、レオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」が、いま最も人気ある題材の一つになっている。この企業の製品もおもに輸出用であり、収益は年間250～300万ユーロというところである。

2004年8月に統一通りの市場を訪れた。屋根つきの大きな3棟の建物にはトイレと手洗い器も備わっている。売り子は制服を着て売り場を示す番号札をつけている。市場のなかは買い物客でごった返し、駐車場は車がいっぱいである。

米1キロの値段はなんと600<sup>ウォン</sup>である。これに対して人々の平均給与は3000<sup>ウォン</sup>である。だが、こんな値段の米が買われている！

平壤市内のキオスクの数は明らかに増えていた。しかも、以前に防水布製テントや布地製のテントによる仮設の小屋が立っていた場所の多くには煉瓦造りの建物が出現していた。

(注) \_\_\_\_\_

<sup>1</sup> Ким Ир Сен, Сочинения, том 43, с. 73 (編者注:『金日成著作集(43)』[朝鮮語版]平壤朝鮮労働党出版社1996年62ページ)。

<sup>2</sup> Там же, с. 308-309 (編者注:『金日成著作集(44)』[朝鮮語版]1996年278-279ページ)。

<sup>3</sup> Ким Ир Сен, Сочинения, т. 44, с. 201 (編者注:『金日成著作集(44)』[朝鮮語版]1996年184ページ)。

<sup>4</sup> Ким Чен Ир. «Клевета на социализм недопустима». Пхеньян, 1993, с. 19-20 (編者注:金正日『金正日選集(13)』[朝鮮語版]平壤朝鮮労働党出版社1998年364ページ)。

<sup>5</sup> 『労働新聞』2004年8月4日。

<sup>6</sup> Ким Ир Сен. Сочинения, т. 43, с. 254-255 (編者注:『金日成著作集(43)』[朝鮮語版]230-231ページ)。

<sup>7</sup> Информационный бюллетень департамента информации и печати МИД РФ, 27 августа 2002г. (「外務省情報局広報」2002年8月27日)。

<sup>8</sup> *Korea Unification Bulletin*, No. 52, February 2003, p. 7.

<sup>9</sup> Информационный бюллетень департамента информации и печати МИД РФ, 6 ноября 2002г. (「外務省情報局広報」2002年11月6日)。

<sup>10</sup> *Korea Focus*, 2002, May-June, Vol. 10, No. 3, p. 106.

<sup>11</sup> *Korea Focus*, 2002, May-June, Vol. 10, No. 3, p. 111.

<sup>12</sup> *Korea Focus*, 2002, May-June, Vol. 10, No. 3, p. 112.

<sup>13</sup> *Korea Focus*, 2002, May-June, Vol. 10, No. 3, p. 111.

<sup>14</sup> РИА “Новости”, 6 июня 2004г. (「ロシア通信」2004年6月6日)。

( 翻訳：ロシア問題研究家 佐藤雄亮 )